

令和 3 年 4 月 24 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00661

研究課題名（和文）形態・統語のインターフェイスにおける英語動詞由来複合語に関する研究

研究課題名（英文）Research on the English Derived Compound Noun at the Interface of Morphology and Syntax

研究代表者

濱松 純司（Junji, Hamamatsu）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20272445

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は英語の動詞由来複合語における、項構造（動詞の取る要素を表示したもの）に基づく意味解釈について、特に接尾辞の種類・役割に着目し、形態・統語のインターフェイス（接点）の観点から、理論・実証の両面において多角的に解明したものである。動詞由来複合語の性質を検証すると共に、形態・統語のインターフェイスを解明し、分析の基礎となるデータの質及び信憑性の向上を一定程度達成した、理論的・実証的研究であると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで蓄積されてきた研究成果を生かしつつ、動詞由来複合語の性質を検証すると共に、形態・統語のインターフェイスの解明を前進させ、分析の基礎となるデータの質及び信憑性を高めた。

研究成果の概要（英文）：This research has shed light on the semantic interpretation of English derived compound nouns based on argument structure, with particular attention paid to the types and roles of suffixes, from a viewpoint of the interface between morphology and syntax. It can be considered as a theoretical and descriptive research that has made clear the morphology-syntax interface and improved the quality and reliability of data that constitute the basis of linguistic analysis.

研究分野：英語学・言語学（形態論・統語論）

キーワード：派生名詞 動詞由来複合語 形態論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

形態論を独立した部門として認めるべきかどうか、また認める場合、統語論といかなる関係を持つのかという問題は以前から問われてきたが、分散形態論の登場により、この問題が改めて突きつけられていると言える。

動詞の名詞化は形態論と統語論とのインターフェイスを探求する上で極めて重要な現象である。名詞句(例: driver of a truck)に比べ、動詞由来複合語(例: truck driver)は派生名詞及びその項をコンパクトに凝縮したものと言えるが、形態論の独立性について検証する際の格好の対象でもありと言える。

名詞化においては接尾辞が重要な役割を果たすが、動詞由来複合語の派生・意味解釈に接尾辞が果たす役割については名詞句に比べ、十分に検証されてきたとは言いがたい。Roeper & Siegel (1978), Selkirk (1982), Lieber (1983, 1992, 2009, 2010) 等の研究により、動詞由来複合語における意味解釈には様々な制約がある点が知られているが、単に制約の列挙に止まり、それらの真の性質は未解明の部分も多い。

コーパスが言語学研究に本格的に活用されるようになって久しいが、理論言語学研究においては、分析の出発点となるデータの判断は、今なお研究者の直感に頼る面が大きい。

形態論においては統語論と異なり、ただ非文か否かの判断を超えた高度な判断を必要とする為、話者の直感とコーパスの両者を適切に利用することで豊かな研究成果が得られる。

以上のような背景のもと、本研究に着手した。

2. 研究の目的

項構造・意味解釈を中心として、動詞由来複合語がいかなる性質を持つのか。形態論と統語論のインターフェイスについて、動詞由来複合語がどのような知見を与えるのか。従来の形態・統語研究において、話者の直感を基としたデータの文法性の判断は妥当であるのか。

自らの名詞句研究の成果を基に、動詞由来複合語に関する先行研究の蓄積を生かし、これらの問題点を解明することが本研究の当初の研究目的であった。

3. 研究の方法

本研究は以下の4つのプロセスに沿って進めた。

(1) 先行研究・データの収集: 動詞由来複合語の形態・統語研究は、1980年代以降に研究成果が蓄積されているため、これらの先行研究を網羅的に収集すると共に、研究期間中に出版される研究書・論文を収集し、学会に参加することにより、最新の研究動向に接した。所属研究機関では不足する文献については、国内外の大学図書館を利用した。インターネット及び大規模コーパスを活用してデータ収集を行ったが、信頼のおける母語話者の内省によるデータの文法性の判断も不可欠であり、信頼のおける英語母語話者に文法性の判断を依頼した。

(2) データの分析: 収集したデータを形態論・統語論の観点より分析・考察し、動詞由来複合語内の意味解釈のメカニズム、派生・意味解釈が行われる部門、及び話者の直感・コーパスの効果・妥当性の観点から詳細に検討することで自らの仮説の立証を進めた。

(3) 研究打ち合わせ等: 研究計画を円滑に遂行するため、研究協力者である Ad Neeleman 教授(ロンドン大学 UCL)と面会し、本研究について助言を得た。一方、国内外の学会等への参加等を通じて、研究者の意見・助言を得ながら研究を進めた。最終年度は新型コロナ感染拡大により、当初予定していた海外での研究打ち合わせ及び国内学会への参加を全て中止せざるを得なかった。

(4) 研究成果の公表: 研究期間中、4点の論文を公刊することができた。上述の通り、最終年度は新型コロナ感染拡大により、研究打ち合わせが不可能となった影響で、研究成果の取りまとめ及び公表が当初の予定より遅れている。今後、研究成果の取りまとめを進め、学会誌への投稿、学会セミナーでの発表等を予定している。

4. 研究成果

本研究は英語の動詞由来複合語における、項構造に基づく意味解釈について、特に接尾辞の種類・役割に着目し、形態・統語のインターフェイスの観点から、理論・実証の両面において多角的に解明することを目指すものであった。

本研究を通じ得られた研究成果は以下の通りである。

(1) 動詞由来複合語における項構造に基づく意味解釈を接尾辞の種類・役割に着目して分析し、複合語内の意味解釈に課される様々な制約の根底にある性質を解析した。

(2) 動詞由来複合語の派生及び複合語内の意味解釈が統語部門・形態部門のどちらで行われるかを解明し、名詞句の派生及び意味解釈と比較した場合の動詞由来複合語の位置づけを明らかにした。

(3) 話者の直感に依拠した従来のデータの文法性の判断の妥当性について、コーパスから得られたデータに照らして検証した結果、理論的主張が個々の研究者の容認性の判断に依拠してなされており、実際のデータとの間に乖離が見られることを示した。

このように本研究はこれまで蓄積されてきた研究成果を生かしつつ、動詞由来複合語の性質を検証すると共に、形態・統語のインターフェイスを解明し、分析の基礎となるデータの質及び信憑性の向上を一定程度達成した、理論的・実証的研究であると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 濱松純司	4. 巻 49
2. 論文標題 関連性理論における語の意味解釈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修大学外国語教育論集	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 濱松純司	4. 巻 107
2. 論文標題 不定詞節を伴う英語派生名詞についての覚え書き	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 専修人文論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junji Hamamatsu	4. 巻 47
2. 論文標題 英語における派生名詞の分類に関する覚え書き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 専修大学外国語教育論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junji Hamamatsu	4. 巻 104
2. 論文標題 英語における「名詞＋名詞」型の複合語の第1要素に関する覚え書き	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 専修人文論集	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------